

創造的芸術活動ワークショップを通じた外出自粛期間中の Well-Being の変化

障害者就労継続支援 B 型利用者を対象として

The change of Well-Being among disabled people in the Creative art workshop during state of emergency declaration

1)謝 雪こう 2)長津 結一郎

1)Setsuko Sha 2)Yuichiro Nagatsu

1)九州大学大学院 芸術工学府 2)九州大学大学院 芸術工学研究院

1)Graduate School of Design, Kyushu University 2)Asst. Prof. Dr, Faculty of Design, Kyushu University

Key words: Well-Being, 創造的芸術活動, 就労継続支援, ワークショップ

目的

本研究は、新型コロナウイルスのため、外出自粛中に開催する創造的芸術活動ワークショップを通して就労継続支援 B 型の利用者の Well-Being がどう変化したかを明らかにすることを目的としている。

自粛期間中は利用者が通所せず、在宅となっていた。出勤日に事業所に電話して出欠をとっていたが、創造的芸術活動ワークショップだけ通所となっていた。ワークショップは九州大学新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動指針と Y 就労継続支援事業所感染拡大防止対策に沿って実施した。

本研究の中で用いる Well-Being とは、身体的、精神的、社会的に満たされた状態と定義している。創造的芸術活動は主に小物の製作、塗り絵、スクラッチの絵、小物デコレーション等としている。

方法

被験者は、Y 障害者就労継続支援 B 型事業所の利用者 33 人である。創造的芸術活動ワークショップの参加者は 23 人、不参加者は 10 人いた（不参加者は来所して休憩エリアで休憩するか、また来所しなかった人である。）。ワークショップ講師は発表者で、作業の補佐を担当する職員が 1 人いた。参加者は 2 週ごとに 1 回、計 9 回事業所のカフェエリアで創造的芸術活動のワークショップに参加した。

Well-Being の評価方法はポジティブ作業等価評価 (Equating Assessment of Positive Occupation: 以下 EAPO) を用いて測定した。EAPO をワークショップの実施の際、コロナ時期前、と通所開始まで計 2 回行った（不参加者も同じ時点で得点を記録した）。統計分析は、参加者と不参加者の平均値を算出し、Excel2016 をもってそれぞれの得点の差を分析した。

結果

参加者と不参加者を 2 群に分け、EAPO 尺度得点の

平均値を算出して比較した。参加者において、初回測定の平均点が 39.63 で、二回目は 46 であった。初回は 2 回目より満足度得点が有意に高かった ($t(21)=1.72, p=.00$)。参加しなかった者においては、初回測定平均点

は 44.20 で、2 回目は 35.3 であった。初回は 2 回目より点数が有意に高かった ($t(10)=2.74, p=.023$)。また、参加者と参加しなかった者の最終回得点を分散が等しくないと仮定した 2 群の検定を実施した結果、参加群は不参加群より点数が有意に高かった ($t(13)=2.64, p=.02$) と分かった。

抑うつ傾向カットオフ値については、初回では参加者の中で 42 点以上得た者は 22 人の中で 15 人、最終回で 17 人と 2 人が増えた。参加しなかった者は初回測定時 6 人で、最終回は 3 人まで減った。

ところが、参加者の出席率と得点の相関関係は見られなかった。

考察

今回の結果から、自粛期間中にワークショップに参加しなかった者の Well-Being 点数が下り、その反対に参加者の点数が上がったことを通して、創造的芸術活動ワークショップは参加者の Well-Being 向上への効果が期待できた。

また、これからの課題として、参加の有無によって、利用者の Well-Being の変化をさらに検証するために反復測定を実施する必要性も感じられる。

参考文献

野口卓也、京極真、他 (2019) 精神障害を有する人における幸福を促進する作業療法プログラムの効果検証：非ランダム化比較試験 精神医学 62(6) 911 - 92